



「不幸の手紙」は忘れた頃にやってくる —100 年史の研究に向けて

丸山 泰明（非文字資料研究センター 研究員）

ある研究室の片隅で

「不幸の手紙」を民俗学の視点から調べ始めてだいぶ長い年月が経った。「不幸の手紙」とは、同じ文面の手紙（葉書）を書き写して決められた人数・時間内に送らなければ不幸が訪れるとするおまじないである。研究者としての人生をふりかえると、中心的な研究テーマというわけでは必ずしもないのだが、けれども常に何となく気になり続けてきたテーマであった。

研究の最初のきっかけは、もう 20 年以上も前の大学院生の時に当時在籍していた大阪大学の日本学研究室で起こった偶然の出会いである。日本学研究室は文学部の中の分野の一つの研究室ではあるが、文学部のいわゆる王道の文学・哲学・史学の各研究室が本館にあることに対し、離れの小さな建物の 3 階にあった。建物の場所はかつては心理学の動物実験で使うサルを飼っていたとかで、夜中になるとサルの悲鳴のような鳴き声が聞こえるというまことしやかなうわさもあった。それはさておき、今もそうだろうが、当時の日本学研究室は、民俗学や文化人類学、宗教学、日本思想史、ジェンダー史といった学問の壁を越えて新しい研究を生み出していこうとする熱気に満ちていた。ちなみに、狭い部屋には日本学を専攻する学部生も大学院生も一緒に詰め込まれていた。大学院生の個人用の机などももちろんなく、みんなが共有の大きな机を使っていて、時には上も下もなく入り混じってぎゅうぎゅうになることもあった。この意味でも熱気に満ちていた。

いささか前置きが長くなってしまったが、いろいろな意味で熱気に満ちた日本学研究室が時たまの静けさに包まれたとき、ひとりぼつねんと座っていた私は、暇つぶしに本棚にあった戦前の雑誌『変態心理』の復刻版を手にとって何ということもなくパラパラと読んだ。そこで「幸運の手紙」について書いている一つの記事が目に残った。この時すぐに、「幸運の手紙」とは子供の時に流行っていたもののすっかり忘れていた「不幸の手紙」の前身の形態であることに気づいた。これがふつうの民俗学の研究室であつたら、「幸運の手紙」のような近代のおまじないなど研究対象になるわけがないと読み捨てていたかもしれない。日本近代史の研究室ならば、目に留まることすらなく読み流されて終わっていたはずだ。だが、そこは日本学研究室だった。なんとなく心に引っかかってしまった。ちゃんと調べていけば、面白い研究

を展開できるかもという予感が宿ったのである。それ以来、合間を見つけて調べ、また目についた資料があつたらコピーを取ったりメモしたりして残すようになった。結果として、これまでに論考を 2 本発表することができた。だから、もしこの文章を読んでいるあなたが大学院生ならば次のアドバイスを送りたい。何か気になったことがあつたらしっかりと抱えて温めつづけるといい、ひょっとしたら卵がかえって雛となり成長して羽ばたき飛び立つかもしれないから、と。このように、「不幸の手紙」の研究は偶然をきっかけとして生まれたものだった。

手紙は地球を回り、幸運も回る

「不幸の手紙」の日本における起源は意外と古い。大正時代の 1922 年に同じようなおまじないが流行している。この時は「幸運の為に」という名前だった。『東京朝日新聞』1922 年 1 月 27 日付の記事「舞込む謎の葉書 薄気味悪い「幸運のため」警視庁でも内偵」では、「幸運の為に」の流行により人々が不安に陥り、警察も取り締まりに乗り出していることを伝えている。この記事に掲載されている「幸運の為に」の写真（図 1）の文面を書くとき次のようになる。

幸運之為に 此通りの文字を九枚の葉書に書いて
貴下が幸運を望まれる人の所へ御出し下さい。九
日経てハ必ず大なる幸運が廻って来ます。但し
此はがきの連鎖を断つ時にハ反対に大悪運が廻は

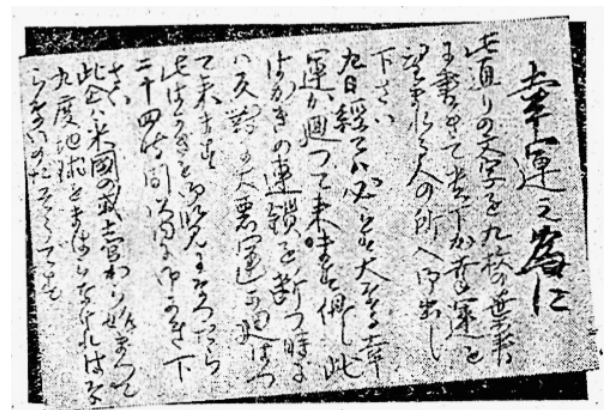


図1 「幸運の為に」の葉書（『東京朝日新聞』1922 年 1 月 27 日付）

って来ます。此はがきを御覧になったら二十四時間以内に御かき下さい。此企は米国の或士官から始まって九度地球をまはらなければならないのだそうです

文面を読めばわかるように、当初は文面を書き写して葉書を出せば幸運がやってくる、けれども葉書を出さなければ悪運が回ってくるというものだった。「幸運の為に」は日本で自然発生したものではなく、すでに外国で広まっていたチェーンレターが日本に流入して広まったものである。その後、「幸運の手紙」と名を変えてしばしば流行しながら生き延び続け、1970年頃に、幸運が訪れる要素が消えた「不幸の手紙」が爆発的に流行するのだ（詳しくは、勉誠出版から2017年に出版された天理大学考古学・民俗学研究室編『モノと図像から探る怪異・妖怪の東西』に収録されている拙稿「手紙が伝える怪異—不幸の手紙の進化論」を参照していただきたい）。

先の「幸運の為に」の葉書で着目したいのは、幸運の要素があることのほかに、おまじないの力が発揮される条件として「九度地球をまはらなければならない」としていることである。今日の我々は、郵便物が地球を回るという感覚はほぼないだろう。だが大正時代は、東廻りと西廻りの航路によって、郵便物は船に乗って地球を回るものだった。もちろん地球を1周するためには何十日もかかる。困難ではあるが、不可能ではない。そのような郵便というメディアに対する今日とは異なる感覚が、「幸運の為に」を期待し恐れて葉書を出す心理を支えていたのである。

マンガという資料

「不幸の手紙」についての研究の難しさの一つは、実物資料が手に入らないことである。近代の大衆文化についての研究者はヤフオクで資料を購入している人も少なくないはずだ。おそらく出品者にとっては何という価値もないものが、研究者にとっては喉から手が出るほど欲しい場合もある。私もヤフオクを活用してきた研究者の一人で、これまで数多くの資料を購入してきた。他の資料と同じように、「不幸の手紙」についても常にチェックし続けているのだが、いっこうに出品されない。また、かつて骨董市で、昔の絵葉書が束になって並んでいたの、「ひょっとしたらこういうところに紛れ込んでいるかも」と淡い期待を抱きながらかなり長い時間をかけて一枚一枚チェックしてみたが、結局のところ徒労で終わった。これまでの歴史の中で、かなり膨大な数の「不幸の手紙」がやり取りされたはずなのだが、表の市場に出てくることはまずない。1970年頃に「不幸の手紙」が流行した際には、神社でお祓いを受けたりお寺で供養されたりして処分されることもあった。もちろん、単にごみ箱に捨てられたものもあっただろう。実物資料として

極めて残りにくい、ということが「不幸の手紙」の特徴を構成していると言える。とはいえ、資料がないと研究をするのが難しい。そこで私がよく用いたのが、新聞や雑誌に掲載されている手紙や葉書だった。

もう一つ、私が「不幸の手紙」の資料として調べているのがマンガである。「不幸の手紙」は人間の悲喜こもごもを巻き起こす物であり、しばしばマンガの題材として取り入れられた。1970年代には、『ドラえもん』や『魔太郎がくる!!』、『恐怖新聞』などに取り上げられている。もちろんマンガはフィクションであるのだが、心の機微や時代の雰囲気をとらえるための格好の資料となる。ここでは、さくらももこ『ちびまる子ちゃん』第8巻（集英社、1991年）に収録されている「その54『まる子 不幸の手紙をもらおう』の巻」を取り上げることにしよう。『ちびまる子ちゃん』は、静岡県の清水を舞台にして、小学校3年生である主人公のまる子の日常生活を描いたコメディマンガである。まる子には、作者のさくらももこが投影されている。さくらももこは1965年生まれだから、小学3年生の時は、「不幸の手紙」が流行した時期とも重なる。作者かもしくはその周囲の実体験を素材にしたストーリーではないだろうか。

ストーリーは次のようなものである。ある日、まる子のもとに手紙が届く。「これは不幸の手紙です。3日以内に、これとおなじいようの手紙を、4人の人に出さないと、あなたに不幸がおとずれます。では、さようなら 藤木」。差出人は、しばしば「卑怯」と言われてしまうクラスメイトの藤木だった。普通、「不幸の手紙」は署名をしないものだが、わざわざ書いてしまうところが藤木らしくて可笑しい。まる子は不幸が訪れると恐れ悲しみ、お母さんやお姉ちゃんに相談するが、ばかにして信じずとりあわない。家族で唯一相談に乗ってくれるのはおじいちゃんだけだが、まる子と一緒にのおそろさだけで役に立たない。ついには父親のヒロシが「こんなもん出すヤツも気に入るヤツも大バカだ」と手紙を破り捨て、まる子の不安も解消される。翌日、緊急学級会で藤木は糾弾されて、不幸から逃れるために他人に手紙を出したはずなのに一人不幸になってしまう。そしてまる子のもとには元文通相手から「不幸」を「幸福」に入れ替えた「幸福の手紙」が届き、元文通相手では懲らしめるわけにもいかずストレスがたまるというオチである。

「不幸の手紙」をめぐるのは、まる子のように受け取って深刻に思い悩んだ人もいただろう。藤木のように、悪いと思いながらも怖さにおびえて手紙を出した人もいたに違いない。そして、ヒロシのように笑って破り捨てた人もいたはずだ。「不幸の手紙」の歴史を解き明かすためには、この国に無数に存在した「まる子」や「藤木」、あるいはヒロシたちの心情に思いを巡らせる必要がある。



幸せと不幸のメディアの 100 年

今年 2022 年は、日本で「幸運の為に」が流行してからちょうど 100 年を迎える。100 年後の今日もつづいている。ただし、やりとりするメディアは郵便からインターネットによるメールや SNS に移行している。たとえば図 2 は、俗に「神の手」と言われる画像であり、Twitter や LINE でしばしば広まっている。雲の手によって開けられた穴から光が差し込んでいる。「友達から届きました。幸せになって欲しい人に送ると、受け取った人は幸せになり、願いが叶うそうです！！ 送る相手が多いのは良い事だそうです！！」と文面にある。ここでは、今度は不幸の要素が消え、受け取った人に幸せが届くとされている。「不幸の手紙」は絶えず変わりながら人間を媒介するメディアと幸せを求め不幸を怖れる心理の隙間に忍び込み進化と繁殖をしつづけるのだ。

「不幸の手紙」は、ただの迷信に過ぎないともいえるだろう。だが、「不幸の手紙」の 100 年の歴史をていねいに読み解いていくと、人間とメディアとの関わりの歴史や、幸せや不幸についての感情の歴史が見えてくる。「不幸の手紙」の 100 年史は、近代から現代にかけて生きてきた人々のある一面を照らし出す研究になるはずである。

「沖縄で何年かに一度現れる
【神の手】という雲だそうです！」

友達から届きました。
幸せになって欲しい人に送ると、
受け取った人は幸せになり、
願いが叶うそうです！！

送る相手が多いのは良い事だそうです！！



図2 筆者の LINE に届いた「神の手」